

自然王国  
ワカサハマギク  
但馬海岸の岩場

但馬海岸のゴツゴツした  
岩場に咲く可憐な小菊

福井県から鳥取県東部までの日本海側の海岸に、白い可憐な花を咲かせます。若狭地方に多いことから若狭浜菊と呼ばれますが、但馬海岸にも多くあります。竹野・香住・浜坂町の海岸線はもちろんのこと。特に浜坂町城山に見事な群落があります。ただ一面に咲くという感じではなく、1mくらいの大きさの群落が点々と続いていくという咲き方で、日当たりの良い潮風があたる海岸の岩場に自生する多年草です。

茎や葉に揮発性の油が含まれていて、竜腦のような香りのするリュウノウギクの変種と考えられています。竜腦はボルネオやスマトラ原産のリュウノウジュからとれる香料で、樟腦

の香りに似ています。リュウノウギクは、福島県及び新潟県より西の本州と四国、九州の一部の丘陵や山地に生えています。

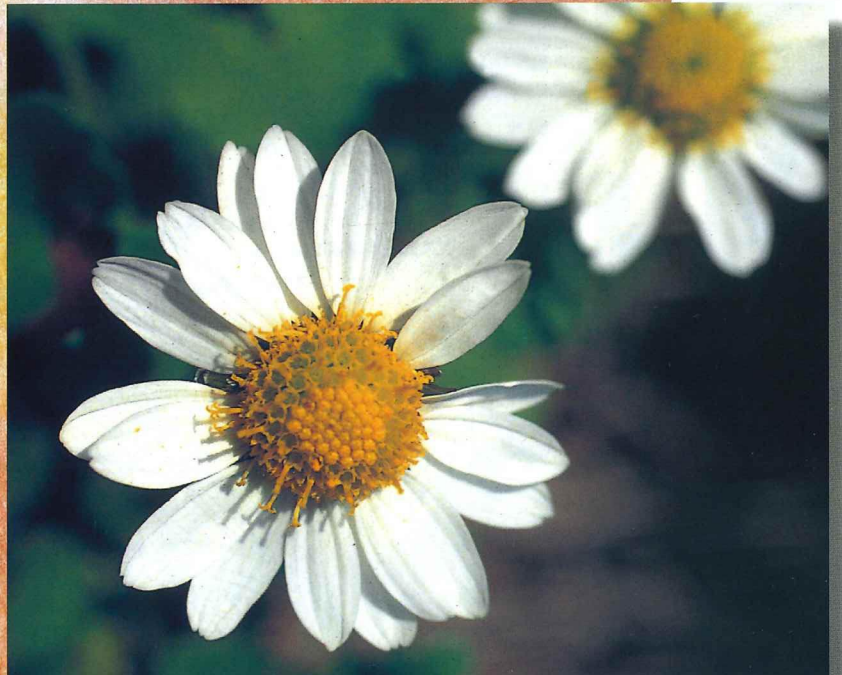
リュウノウギクの染色体数は $2n=18$ で、ワカサハマギクの染色体数が $2n=36$ であることは知られており、リュウノウギクが日本海側の岩場で特殊化した四倍体として分化したと考えられています。

滋賀県伊吹山の石灰岩地でも、リュウノウギクの四倍体が報告されていますが、これはリュウノウギクの形をとどめたまま染色体が倍加したものと考えられ、染色体数はワカサハマギクと同数ですが、リュウノウギクの倍数体として分類学的には取り扱われていません。

ワカサハマギクも基本的には、リュウノウギクと同じ形ですが、葉が少し厚いなど全体に強壯な感じがします。ワカサハマギクの茎は細く、毛が密生しています。葉は長さ4〜8cmの広卵形で、ふつう三中裂し、縁には大



写真は浜坂町の海岸で撮影されたものです。白く美しい花ですね。



きな鋸歯のぎばねがあります。裏面には丁字状毛が密生して灰白色に見えます。リュウノウギクの葉と同様に、すりつぶしシヨウガをませたものは肩こりや腰痛に効くといわれています。これも良い香りのする揮発性の油が含まれているおかげでしょう。

花が咲く期間は10〜11月で、花の大きさは直径2.5〜6cmで、たくさん花をつけます。花びらは白色ですが、時には淡い紅色を帯びています。

雨にうたれたり、咲いてから時間が経つと色づくことが多いようです。ゴツゴツとした男性的な但馬海岸の岩場に、かわいらしいワカサハマギクが彩りを添えています。夏の喧嘩けんかが消え、人影がめっきり少なくなった但馬海岸を、ちよびりセンチメンタルな気分で見守る。海岸線を散歩したなら、ワカサハマギクを探してみてください。けなげに咲き誇っていることでしょう。

協力：陽一郎さん

給振・年金の受皿に  
「たんぎんマイライフ通帳」はいかがですか？

総合口座通帳と貯蓄預金通帳が1冊になり、より便利で使いやすくなりました。

地域とともに発展する  
**但馬銀行**  
本店 豊岡市千代田町1番5号



# 名人の技

## お母さんが織っていた風通織 やつぱり織るのが好きです

風通織名人 山根登代子さん(村岡町)85歳

茜の里工房にはパタンパタン、シユッ シユッ、パタンパタンと機を織る音が響いていきます。山根登代子さんは但馬での風通織の第一人者として、次々と作品を生み出し、たくさんの人々を教えてきました。

「母が機を織っているのを、見て育ちました。今使っているこの機も母が使っていた物ですから、明治からずっと使っていることになりましたかね」

年期の入った機に座り、コツコツと地道な作業が続きます。

風通織とは織り方の方法の一種



決められたパターンを、手と足が寸分の狂いもなく動いていきます。柄によって手と足のパターンが変わってきます。細かな模様が少しずつ少しずつできあがっていきます。



山根登代子さんは工房でコツコツと織っています。



で、表と裏に異なった色のたて糸とよこ糸を使って、それぞれの布面を構成し、文様の部分で表と裏の配色が逆になるように織った二重構造の織物です。表と裏の糸が交差する部分以外は、表裏別々にあらわした布2枚によって、袋状になっていることから、風通織の名が付けられたといえます。この技法はすでに正倉院の中に、その例が見られ、とても歴史の古いものだそうです。風通織は二重になっているので、生地がしっかりしており、柄模様も50種類からあります。



茜の里工房で機を織っています。中には山根さんの作品が展示もしてあります。

また、山根さんは絹糸を仕入れ、草木染めで染めています。桜、ハタケワサビ、ススキ、茜などを使って味わい深いあたたかみのある色が出ます。「染めるたびに少しずつ、色が違うんです。この色とこの色を使って、こんな模様を織ろうと考えているときが一番楽しいですね」

機には8本の木が足元に並び、2本のひが、よこ糸として通っていきます。足と手が絶え間なく動き、布が織り上がっていきます。とても複雑な動きで、バツと見たくらいでは覚えられません。間違えると、そこまでほどいて、またやり直すそうです。根気のいる仕事です。



風通織の柄は格子模様で二重になっています。

山根さん自身が染めた糸。草木染めでしか出せない味わい深い色。サクラ、ペニバナ、ソヨゴ、ススキ、ハタケワサビなどで染めているそう。



「1m織るのに、1日では無理ですね。若い人ならもつと速いでしょうけど。今年の冬ははんでんを3枚、作ろうと思っています。風通織の反物に真綿を入れると、軽くてあたたかくて人氣があるんです」

木の殿堂ができたときは、木の殿堂をイメージして模様を考え織りました。部屋のアクセサリとしても、おしゃれな風通織。山根さんのセンスが光る作品が工房に展示されています。「どんなにしんどくても、やつぱり織りが好きなんです」と笑う山根さんでした。

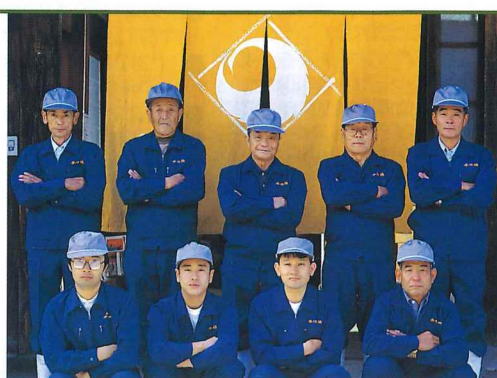
伝統はいつの時代にも生きている

真心の酒

# 香住鶴

山廃仕込 但馬の誇り 1.8ℓ詰

山廃仕込 但馬の自信 1.8ℓ詰



## 造り酒屋の歳時記

### 蔵入り

春四月、帰郷のあと休む暇なく、農作業にいそしみ、やがて無事秋の収穫を終えた蔵人達は十月吉日、一斉に蔵元に集まります。秋、冬、そして春と半年余りを酒造りに精魂を注ぐ男達により再び酒蔵の中に緊張が走り、活気が充ちあふれます。